

新たな北海道総合開発計画に関するシンポジウム ～「ほっかいどう学」の展開に向けて～

日 時：平成 29 年 3 月 21 日（火）14:30～17:00

場 所：札幌第 1 合同庁舎 2 階 講 堂

議 事 次 第

1. 開 会
2. 主催者挨拶
3. 事務局説明
4. 基調講演 I
5. 基調講演 II
6. パネルディスカッション
7. 閉 会

1. 開 会

○司会 それでは、定刻となりましたので、ただ今から「新たな北海道総合開発計画に関するシンポジウム～『ほっかいどう学』の展開に向けて～」を開会いたします。

本日は、皆さまお忙しいところお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。私、本シンポジウムの司会を担当いたします北海道開発局の井田と申します。どうぞよろしく願いいたします。

2. 主催者挨拶

○司会 初めに、開会に当たり、北海道開発局開発監理部次長の原俊哉から一言御挨拶申し上げます。原次長、よろしく願いいたします。

○原開発監理部次長 北海道開発局の原でございます。皆さまには、お忙しいところ、新たな北海道総合開発計画に関するシンポジウムに御参加いただきまして、誠にありがとうございます。

御承知のとおり、昨年3月に新たな第8期の北海道総合開発計画が閣議決定されました。計画では、北海道の強みを活かすことができる食と観光を戦略的な産業として振興するということと、その食と観光を担う生産空間として、主として地方部の空間を指していますけれども、その生産空間を支えて、世界の北海道を目指すということにしております。

この計画の策定後ですけれども、シンポジウムですとか、パートナーシップ会議等々を通じて周知活動も行っておりますし、計画の実現に向けたさまざまな事業、取組を精力的に進めているところでございまして、今回のシンポジウムもその取組の一つでございます。

計画では、「人こそ資源」と位置付けて、人口減少時代であるからこそ多くの人材を発掘して地域づくりに取り組むべきとしております。その取組の一環として盛り込まれたのが、本日のテーマであります「ほっかいどう学」でございます。より多くの人々に地域づくりに関心を持っていただけるように、北海道の魅力ですとか、地理、歴史、文化、産業などについて、子どもから大人まで幅広く学ぶ取組を進めたいというふうに考えております。

本日のシンポジウムでは、まず、ノンフィクションライターの北室様と札幌市立発寒西小学校長の新保様から基調講演をいただきます。北室様は、JR北海道の車内広報誌等で北海道の幅広い魅力を伝えていらっしゃる方ですし、新保様は、この計画の策定前に、「ほっかいどう学」に関する提言をいただいた方でございます。

この御講演の後、お二方に加えて、北海道教育大学教育学部准教授の今様、それから、北海道開発技術センター理事の原様に御参加いただいて、「ほっかいどう学」の展開に向けてというテーマでパネルディスカッションをお願いしております。

4人の皆さまには、それぞれの御専門の立場からさまざまな御意見・御提言をいただ

けたらというふうに思っております。どうぞよろしく願いいたします。

最後ですけれども、このシンポジウムが「ほっかいどう学」の具体の取組のキックオフとして意義あるものになること、そして多くの皆さまに地域づくりへの関心を持っていただく機会となるということを祈念して、簡単ですけれども、御挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしく願いいたします。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

3. 事務局説明

○司会 それでは、プログラムに沿って進めさせていただきます。

最初に、北海道開発局開発監理部開発計画課長の竹原勇一より、新たな北海道総合開発計画に位置付けられた「ほっかいどう学」の概要について説明いたします。よろしく願いいたします。

○竹原開発計画課長 開発計画課長の竹原でございます。よろしく願いいたします。

私の方から、この「ほっかいどう学」というものが、一体どういうものなのかという概要につきまして、皆さま方に御説明差し上げたいと思います。座って説明させていただきます。

お手元の資料で、パワーポイントの今スライドに映っておりますけれども、こちらが新たな北海道総合開発計画に位置付けられた「ほっかいどう学」の概要等という紙がございますので、ご覧いただければと思います。

まず、この「ほっかいどう学」が位置付けられました北海道総合開発計画の枠組について簡単に御紹介したいと思います。

まず、明治2年に開拓使が北海道に設置されて開発を進めてきたということでございます。特に、戦後ですけれども、食料の増産ですとか、人口収容、あるいは資源開発、こういった目的から北海道開発法が昭和25年に制定されたと。この北海道開発法に基づいて、その時々々の国の課題の解決に寄与することを目的として、国がこれまで8期にわたりまして開発計画を策定してまいりました。

その下の計画の推進のための措置とございますけれども、この開発計画を推進するためにいくつか措置がとられております。ここには記載はございませんけれども、北海道開発庁という特別の役所が設置されて、今現在は、それが国土交通省になっておりますけれども、それ以外に、まず一つ目に、公共事業の経費の一括計上ということで予算上の担保がなされているということでございます。

もう一つ、開発計画に基づく事業の経費の見積もり方針の調整、これを実施している。あと、国庫負担率、直轄事業の範囲、こういう公共事業の経費負担の内容、あるいは国が直接行う事業の範囲、こうしたものについても北海道がより手厚い特例になるような制度を設けてきたということで、現在、国土交通省の北海道局でございますけれども、北海道局と、あと、現地の私どもの北海道開発局という実施機関、こうした推進体

制の下、事業を実施しております。

新たな計画策定の背景でございます。こちら、第8期の計画が昨年3月に制定されております。本格的な人口減少時代の到来、アジア市場をはじめとしたグローバル化、あるいは東日本大震災など、北海道開発をめぐる情勢が変化しているということでございます。

あと、全国版の国土計画といたしまして、国土形成計画というものがございます。こちらにつきましても、同様の理由から見直しがなされてきたと。

北海道総合開発計画も前倒しということで、その前の7期計画、10年間という計画期間だったのですけれども、その10年を待たずに前倒しして策定したというのが昨年の閣議決定でございます。

そちら、第8期の開発計画の全体構成でございます。4章構成になっておりまして、第1章で北海道開発の経緯を、あるいは時代の潮流、計画の意義、こういったものが記載されております。特に、今回の計画は、人口減少、高齢化という大きな動きがございます。この進展の中で、どのように北海道開発を進めていくのかということが謳われているわけでございます。

次に、第2章で目標、こちらが記載されております。三つの目標として、人が輝く地域社会、世界に目を向けた産業、強靱で持続可能な国土、こういう三つの目標を掲げております。キャッチフレーズといたしまして「世界の北海道」と、世界の中で北海道をどう考えていくかと。北海道を世界にどう売り込んでいくのか、世界との関係の中で北海道をどう考えていくのかと、これがキャッチフレーズでございます。2050年を見据えて、「世界水準の価値創造空間」、こういう言葉で計画の目標を謳っております。

第4章で具体的な主要施策が書いてあるのですけれども、特に「食」と「観光」、世界に目を向けた産業の振興といたしまして、この二つ、これがこれからの開発の柱になっているということでございます。

続きまして、開発計画の中での「ほっかいどう学」の位置付けでございます。

「ほっかいどう学」につきましては、第4章の第1節、人が輝く地域社会の形成の中で、地域づくり人材の発掘、育成のために、「ほっかいどう学」の取組を促進すると、こういうふうに記載されております。

本日、御講演をしていただきます新保校長先生の御提言が一つのきっかけになって、計画に記載がなされたというわけでございます。

下の部分ですけれども、「ほっかいどう学」でございますけれども、北海道教育委員会様で、今、これまで道民カレッジですとか、ネット検定、こういう取組を行っておられるところがございますので、こうした動きとも連携をいたしまして、道庁さんの動きとも連携をいたしまして、私どもとしても「ほっかいどう学」を展開していきたいと、こういうふうに考えております。

続きまして、「ほっかいどう学」の推進、どういう中身かというのを簡単に説明させ

ていただければと思っております。

学習の目的ですけれども、学習の目的といたしましては、北海道の地域特性、あるいは個性、こうしたものに焦点を当てて、これを日本や世界との関係を意識しながら学んでいただくと。そうしたことによって、北海道に対する理解や愛着を深めてもらうと。世界の北海道づくりに取り組む人材、北海道の経済発展を牽引する人材を発掘・育成すると、こうしたことが目的となっております。

次のページでございますが、当面の推進体制といたしますけれども、当面、私ども北海道開発局が事務方を務めながら、今日おいでいただいている、講演いただく、パネリストとして来ていただいている、こうした学識経験の方々、あるいは教育関係者、あるいは道庁さん、教育委員会さんをはじめとする関係行政機関と、プロジェクトチーム（PT）のようなものを立ち上げて具体的な内容の検討、あるいは気運の醸成、あるいは各方面での説明、こうした取組を進めていきたいと思っております。

続きまして、「ほっかいどう学」の具体的にどういう素材を学んでいくのか、このイメージが次の資料で書いてございます。

学ぶ対象といたしましては、さまざまな分野が考えられます。「1 自然」とありますけれども、北海道特有の自然ですとか、あるいは北海道の特有の歴史・文化、あるいは北海道の環境、あるいは産業構造、そして地域づくり、こうした視点が考えられるかと思えます。

こうした分野別の視点に加えて、私ども開発局の担当している部分で申しますとインフラですとか、あるいは人、具体的に時代の先端を切り開いた技術者とありますけれども、どういう人たちがこれまで尽力されてきたか。北海道の経済状況、こうしたある意味、分野横断的な切り口も考えられるということでございます。

次に、具体的なイメージをさらに御紹介いたしますと、例えば北海道の地域特性、個性の中でも、自然ですとか、あるいは地域づくりということで申しますと、北海道の面積、国土の22.1%の面積を占めているというのが、九州の2倍以上に相当する広大な面積ですとか、右側の方でございますが、都市間距離が他地域と比べて2倍、3倍になっていて、北海道が広いということございまして、根室から函館まで、東京ー大阪の直線距離に相当するわけでございますが、こうした広さに起因するような独自性、個性、こうしたところに着目するというのもございます。

続きまして、歴史・文化ということで、本州ですと弥生文化というのが、水田耕作と鉄器を作る技術を持った文化として、西日本から東北地方まで広がったわけでございますけれども、北海道の場合は、縄文文化の後に弥生文化ということではなくて、続縄文文化、あるいは擦文文化、あるいはオホーツク文化、こうしたものが見られていたり、あるいはその擦文文化とオホーツク文化が融合してアイヌ文化へと変わっていったというような研究があるわけでございます。

あらゆるものに魂が宿っていると考えていた縄文人の精神は、アイヌの方々の信仰で

すとか、あるいは日本人にも受け継がれている。こういう北海道独自の歴史・文化があるというところ、こうした部分に着目するということも考えられます。

もう一つ、人口でございますが、戦後から90年代までほぼ一貫して増加してきて、さらに近年、人口減少が急速に進んでいるという状況でございます。

こうした地域、なかなか世界史的にも稀有な地域であるというところ、これも一つの個性といたしまししょうか、北海道の特性というふうに考えられております。

次に、インフラの例を取り上げていきたいと思っております。

北海道のインフラですけれども、積雪寒冷という厳しい気象条件の中、さまざまな課題を克服しながら整備されてきたということでございます。

最初、①に書いてある写真でございますが、こちらは一般国道5号の整備ということで、明治12年ころの様子でございます。ちょっと見づらいのですけども、真ん中の黒い服を着た方、この方がジョセフ・クロフォードというアメリカ人だというふうになんて言われております。将来、鉄道を敷設するために、鉄道路線とするような一つの見込みの下、道路を切り開いていったというふうになんて言われております。アフターと書いてあるのですけども、これは現在の一般国道5号の様子ということで、こういう形になったということでございます。

その下の写真ですけれども、石狩川、生振捷水路ということでございます。捷水路ですけれども、川の曲がりくねった蛇行部分をカットして直線的な流れに修正して、治水のためにこういうことを行ったということで、この生振捷水路は、石狩川で初めて着手されたもので、石狩川捷水路の中でも最長のものでということで開通まで14年を要しております。石狩川治水の大きな一歩となったものでございます。

次のページでございます。苫小牧港の様子でございますけれども、苫小牧港、建設前の苫小牧の様子ですけれども、イワシの地引き網漁でにぎわっていた砂浜だったというふうになんて言われております。それは昭和26年に世界で初めての大規模な掘り込み式港湾ということで着工されて、昭和30年代から本格的に掘り込み工事が開始されたと。右の写真が現在の苫小牧西港の様子でございます。我が国屈指の国際拠点港湾というふうになっております。

4番目、農地の整備でございますけれども、篠津地域の様子なのですけれども、これ少し具体的に取上げてみたいと思います。

次のページでございます。農地の整備の例解ということで、農地の篠津地域の例を元に、一つ詳しく解説していきたいと思っております。

北海道の水田造成ですけれども、北海道拓殖計画に基づいて国策として行ってきたというものでございます。しかしながら、昭和20年、戦後を迎えた我が国経済は著しい混乱状態にあつて、戦後の我が国経済、国民生活を復興させるために国内資源を開発して、食料難の打開を図ることが急務とされてきております。そこで北海道の開発が国家的な課題としてクローズアップされるようになっております。

こうした状況の中、国家的課題である食料増産、引揚復員者の救済に応えるため、昭和26年に石狩川流域総合開発計画、これが樹立された。この計画に基づいて、この地域、激しいぬかるみの泥炭地の地域だったのですけれども、この開発が行われるようになったということでございます。

昭和29年に食料増産対策として、農業の開発を効率的に実施するために技術的な援助を受けるために政府がフランスですとか、国連食糧農業機構（FAO）、あるいは世界銀行、こうしたところに支援を求めた。その調査団が訪れている。この写真は世界銀行の農業調査団による泥炭地開発事業の調査でございます。

世界銀行の調査団ですけれども、石狩川水域を訪れて、比較的温暖、平坦で、水利上も恵まれているけれども、大部分が泥炭地、未利用のままであったこの篠津地域が、開発するとその効果が高い地域ではないかということで、その支援対象地域に選定されております。こうして食料増産と経済発展などに資することを目的とした篠津地域の泥炭地開発事業、これが昭和30年、世界銀行の融資を受けて着工したということでございます。

篠津地域の開発ですけれども、軟弱な泥炭地ということで至って劣悪な条件の下開発を行ってきた。しかも、こうした経験が我が国は乏しくて短時間で大規模な工事を進めるには、多くの技術的問題が生じております。

この開発事業ですけれども、まず、排水をどう進めていけるのかということが大前提であるということです。そうした中、二つ写真がございますけれども、表層の泥炭は、このレールの上を自走するのですが、自走式のラダーエクスキャベーターという機器、こうしたもので水路を掘削しております。あるいは下層の方の砂質土、粘性土、これはポンプ浚渫船、右側の写真ですけれども、これで実施されているということでございます。

さらに、泥炭地を農地に変えていくためには、大量の土を運び込む、客土を行う必要があるということでございます。この客土につきましては、先ほどのポンプ浚渫船により掘削された運河の下層土を、濃度を濃縮してそれを圃場に散布すると、こういう方法をとったというふうに言われております。これは最も経済的な方法だったということですが、新しい工法で前例がなく、実施する上で多くの問題を解決して実施に至るということでございます。

篠津地域の開発でございますが、軟弱な地盤、水はけの悪い泥炭地、そして、こうした地域の工法も確立が必ずしもされていない。機械が沈んでいくという、左側の写真ですけれども、作業中に自重でブルドーザーが沈んでいくというような困難な状況だったということでございます。

このような状況を克服するためメーカーが湿地用ブルドーザー、右側の写真ですけれども、この開発に着手していろいろ試行錯誤を繰り返しております。昭和29年に、キャタピラの部分に三角形の断面の履板（りばん）、キャタピラについているもので

ございますけれども、これを装着して比較的沈み込みを防ぐ、こうしたブルドーザーの改良に成功しているということで、これが軟弱地盤での農地造成で活躍して、今日の湿地用のブルドーザーの基本となっているということでございます。

こういう先人たちの努力によって、今現在の篠津地域ですけれども、1万1,300ヘクタールの水田を整備して昭和46年に完了して、これが生産性の高い水田に転換して、北海道を代表する稲作地帯に成長したということでございます。

以上、これは、あくまでも「ほっかいどう学」の対象となり得る素材のイメージとして篠津地域を御紹介いたしました。

こうした北海道の地域特性あるいは個性、あるいは歴史的なもの、こうしたものに着目して、北海道の理解、愛着を深めていくと、これが「ほっかいどう学」の趣旨となっていると、素材、題材となっているというふうに考えております。

以上、簡単でございますけれども、説明、以上で終わらせていただきます。

○司会 ありがとうございます。

「北海道をつくった技術者たちの “ノブレス・オブリージュ”」

ノンフィクションライター 北室 かず子 氏

○司会 引き続きまして、基調講演の I へと進めさせていただきます。

御講演いただきますのは、ノンフィクションライターで、編集者の北室かず子さんをお願いしております。

北室様は、長年にわたり JR 北海道の車内広報誌『THE JR Hokkaido』のライターとして北海道の幅広い魅力を伝えているほか、『学校では教えない日本地図の不思議発見 100』や『18章でつづる 北海道 赤レンガ庁舎物語』など多くの著作がございます。

また、北海道地方競馬運営委員会委員などの公職も務められております。

また、北室さんをはじめ講師の方々及びパネリストの方々の略歴はプログラムの裏面にありますので、御参照いただければと思います。

本日は、北室様には「北海道をつくった技術者たちの“ノブレス・オブリージュ”」と題しまして御講演を頂戴いたします。

それでは、大きな拍手でお迎えしたいと思います。

北室様、よろしく願いいたします。(拍手)

○北室氏 ただ今御紹介いただきました北室かず子でございます。ノンフィクションライターと編集者をやっております。私自身は、1991年に北海道に参りました。遅れてきた開拓者で新参者でございます。91年からずっと北海道内で取材をさせていただいてきてまいりまして、自分自身が北海道の近代技術というものにうっすらと感じてくるものがありました。この度、このお話をいただいて、今まで自分が読んだ文献なども含めて、大体3,500ページぐらい読みまして、それでようやく、あれっもしかしたらこんなこともあるのかなど。会場の皆さまにとっては、とうに知っているわというようなことも知れませんが、自分自身がコンテンツを作っていく中でおもしろいなと思ったことがありましたので、今日は御報告をさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

今日お手元にお配りしている資料は、自分が探していく中で作った取材ノートのようなもので、大変雑駁な未完成なものでお恥ずかしい限りです。

それから、土木学会誌の連載「外から見た土木」に一昨年寄稿した文章も配付させていただきます。この連載の初回は、東大名誉教授の上野千鶴子先生が書かれました。私自身は、取材で感じたいろいろなこと、社会資本整備の中での技術の物語という

ものを国民である私たちが知りたいということを書かせていただきました。

では、座ってお話をさせていただきます。

今日は、「北海道をつくった技術者たちの“ノブレス・オブリージュ”」ということで調べてまいりました。

これは、旧士幌線の第3音更川橋梁です。こういう工事をしている方々の生の写真というのはものすごく迫力があって、私は取材で出会うたびにものすごく嬉しくて興奮してしまいます。

私が今まで感じてきた北海道の開発の特徴というのは、その社会資本整備の始まりが、ちょうど19世紀後半だったということ。これがルネッサンスを経て17世紀に純粋科学がどんどん発展して、18世紀後半から19世紀にかけての産業革命が起こりという中で、19世紀というのは、恐らくさまざまな社会のいろいろな分野に科学技術が応用されていった、その科学技術のエッセンスが隔々に行き渡ろうとしていった最初の時代ではないかと思います。ちょうどそのときに北海道の開発が始まった。

そして、北海道は地理的にも日本の北にあり、ロシアに接しており、それから豊かな資源があって空間的にもものすごく広いということで、北海道には大きな意味があったということで、時代もそうですし、いろいろなことが重なって、北海道は一番初めの、いわゆる近代の開発から近世のそういうインフラ対策というものを経ることなく、近代科学の成果が注ぎ込まれたということでもものすごく特徴的な場所ではないかと思います。

それで、私が一番興味を持って取材を続けてきたのが、人々はどんな思いでそれを担ったのかということでした。そういった北海道の開発史を、また、世界の科学史の流れの中、技術史の流れの中で見ていく。それからまた、ちょうど明治維新から日本の大きな政治的な転換があった中で日本の思想史の中での北海道開発史というものを見ていくと、ものすごく、その文脈の中で再構築していくことによって、何か自分自身が新しい勇気を得られるのではないかというような予感がしました。今はきっと得られると確信しております。

そこで、石狩川の治水事業に取り組んだ岡崎文吉という土木技術者の実践を通して、今日は私が気づいたことを報告させていただきます。

これはJR北海道さんの特急列車に搭載されている車内誌『THE JR Hokkaido』で、その特集で何度か近代技術について取材させていただいてまいりました。

今日のテーマ“ノブレス・オブリージュ”、これは皆さまよくご存知のように、フランス語から来ておりまして、直訳すると「高貴であることは義務を伴う」という意味です。高貴というのは貴族を指したわけですがけれども、貴族といえ、このように働かずに莫大な地代収入がありましたから、気候の良い夏は都市部において、例えば、英国貴族だとロンドンにおいて社交に明け暮れて、それ以外の季節は郊外のカントリーハウスで狩猟をしたり、馬に乗ったり、釣りをしたりというような暮らしをしているというような貴族たちでしたけれども、でも、恵まれている者は、自発的に無私の行動を起こさな

なければならないという自覚というか、矜持というか、誇りというか、使命感のようなものを持っていた。

そんな中で第一次世界大戦が起きます。何とその第一次世界大戦では、英国貴族とその子弟の19%もが命を落としています。それは、ノブレス・オブリージュというものがものすごく苛烈な形で発揮されたからだと思います。ですので、ノブレス・オブリージュというのは、エリートが上から目線で何となく気持ち良くなるための言葉ということではなくて、元々は、このような非常な苛烈な意味がありました。

この19%というのは、全将兵平均の2倍にも当たると。いかにノブレス・オブリージュというものが貴族を縛っていたかということが分かるかと思います。

でも、私たちは、戦争で命を投げ出す形のノブレス・オブリージュは共有できません。ならば、ノブレスというのは何なのでしょう。今の時代で高貴であるということはどういうことなのでしょう。それは、ミリオネアのような大金持ちとか、トランプ大統領のようなビリオネアということなのか、それともものすごい権力の座にいるということでしょうか。

そうではなくて、私は、さまざまなこれまでの近代以降の北海道の取材を通して感じたのは、自己が持つ力を人のために役立てること。そのために自己を向上させていくということではないかと思いました。そうした足跡が北海道にはたくさんありました。

それを教えてくれた人の一人が、明治時代の土木技術者の岡崎文吉という人です。これは岡山藩士の長男、下級武士の長男として生まれて、札幌農学校工学科の1期生。22歳で農学校助教授、25歳で北海道庁技師という大変優秀な人でした。そして、27歳のとき、石狩川の洪水で118人が死亡ということが起き、28歳で石狩川治水事業に携わります。

今日のこれから話させていただくことは、浅田英祺（あさだひでき）さんがおまとめになった『流水の科学者 岡崎文吉』というご本を参考に勉強させていただきました。

その中で、私が気がついた岡崎文吉の特徴、それを七つ、岡崎文吉の中のノブレス・オブリージュということで紹介させていただきます。

まず、マルチである。豊平橋の設計も、最初の人渡る鉄の橋として設計したのは岡崎文吉です。それから、旧北海道庁の赤レンガ庁舎が火事になりましたけれども、その原因解明にも当たっています。そして、今日メインでお話しする石狩川治水、小樽港、函館港、水力発電、これは渡島の水力発電です。それから、アメリカのミシシッピ州、中国の遼河改修。ミシシッピ州は自分の作ったものが使われました。

このように、現在の細分化された工学ではとても考えられない、橋梁設計から土木から、建物から防災まで全てやっているという人で、ですから、マルチであると思いましたし、岡崎文吉は分野を問わず、地域づくりと社会資本整備に己の力を注ぎ込んだ、本当にマルチプレイヤー、スーパーマンのような人だったと思います。

次に二つ目はエクセレントでした。いくらいろいろなことに手を出しても、精度がな

ければ人の役には立ちませんが、1904年に洪水観測をなし遂げました。これは、何人もの今の水理学のご専門の先生方に伺いましたけれども、大変危険な洪水時に人をものすごく配置して正確な観測を行うというのはものすごいことだったと、皆さんが口を揃えて言ってらっしゃいました。さらにすごいのは、この観測結果から将来の洪水流量というものを計算して、毎秒8,350 m³という数字を出しました。この数字が実は半世紀以上70年とも言われていますけれども、石狩川の治水計画の指標になりました。

それで、平成3年に中央大学教授の山田正先生らが再現実験をなさって、このときに出た数字が8,150 m³毎秒。この報告書では、岡崎文吉による洪水流量の算定は、現在でも十分妥当なものであると。

一方、ちなみに利根川では、1911年以降50年間に2回改訂されています。ですから、岡崎文吉の正確なその観測と計算が、どれだけ石狩川の治水事業に貢献したかということなのです。

三つ目が大変ストイックであるということ。洪水の観測、計算に非常にこだわっていましたが、一方、開拓民の方々というのは、一刻も早く堤防を造ってほしい。それは当然のことですけれども、せつかく開墾した土地が流され、自分たちの命が危険にさらされるということですから。けれども、やはり一番大事なのは観測であり、計算であり、設計であることで意志を貫きました。

それから、私生活では大変自分に厳しくて、最愛の息子さんを2人亡くしながらも職務を離れませんでした。資料の中にも入れさせていただいておりますが、18歳の次男の方が慶応大学の予科にいらっしゃったときに結核で亡くなりましたが、そのとき岡崎文吉は石狩川でのお仕事を一段落して、中国の遼河に招かれて改修事業に当たっていました。結核で非常に危ないという我が子を残して遼河に行かれ、亡くなったときもお帰りになりませんでした。

四つ目は独創的であるということです。近代科学技術のとば口にあったこの時代に自然主義を提唱しています。それは、とにかくガンガン固めれば良いとか、川を人間の力で変えていけば良いというのではなくて、川の滞筋（みおすじ）は理想的に成就してきたものだから、自然のままにできるだけ維持して、洪水時に超過分を通過する、循環させる新水路を作り、その両側に堤防を築くという放水路方式を石狩川の治水方式として提唱しました。

これは、岡崎自身がドイツやフランス、ヨーロッパ、アメリカを実際に視察してみたときに、ドイツ派は、このとき河川を切り替えて直流させて、水面勾配を急にさせて、とにかく水をたくさん流すという方針でした。ライン川がその代表だったわけですが、その結果ライン川は、流速が速過ぎて水運に悪影響を及ぼし、しかも流れが元のように、そうやって人間が一生懸命真つすぐにしても、川の流れが元のように曲がっていつているということを岡崎は見抜いています。ですから、極端主義による治水工事と

いうものは、将来にわたって悪影響が生じる教訓だと受け止めて帰ってきました。

このライン川の水運への悪影響というのが、やはり一番大きなこのドイツ派に対する危機感だったと思います。水運を重視したのは北海道開拓に、当時、船が不可欠だったからです。これは上川丸と言って、今、江別の方に保存されていますが、外輪式の鉄製蒸気船で、こういったものが石狩川を行き来していました。現代の交通インフラとは全く違うもので、ですから、それが石狩川の流が急になったりすることによって、この交通路手段が悪化するということを、やはり岡崎が一番恐れたのだと思います。実際そうです。

それで、いろいろな船に乗って運ばれる物資の量というのも全部計算していて、その経済効果というものも導いています。ですので、本当に技術者であり経済学者であり、その地域を作っていくためのマルチな人だったと、そういう立ち位置にいた人だったと分かります。

五つ目はクリエイティブである。これは独創性とはまた違います。違いますというか、独創的なのですから、自然主義というのを「絵に描いた餅」的に提唱するだけではなくて、それでは技師たちはみんな不安でしたから、水の破壊力に耐える方法を生み出せば良いということで、明治42年に「北海道庁42年式屈撓性鉄筋混凝土（コンクリート）単床」というものを編み出します。これは岡崎式マットレスということで、これが工事風景ですけれども、ブロックの中央に穴を開けてその中に金属線を通してつなぐと、頑丈でかつ織物のようにたわむので、川岸から川の底までびっしりと覆うことができる。しかもコストも半分にダウンするという徹底ぶりでした。

この岡崎式マットレスですけれども、石狩川で5,800mにわたって敷設されたのはもちろんです。本州では、ブロック一つ一つがヨーカンに似ていたということで、ヨーカンブロックとか鎧とか言われながらも、利根川水系、信濃川水系にも普及していますし、何よりすごいのがミシシッピ川の川岸1,600kmにわたって敷設されました。

これは、1910年代に、アメリカはものすごいお金を投じながらもミシシッピ川の護岸と洪水に悩んでいたのですけれども、これを採用したことについて、「皮肉なことにミシシッピは、護岸の解決法をOkazakiと名乗る日本のエンジニアから借りた」という言葉が残っています。明日、WBCの運命のアメリカ戦ですけれども、この言葉を贈りたいと思います。皮肉なことというところに、本当に悔しさがにじみ出ていると思いますけれども、でも、採用せざるを得なかったということです。これが、何年前に写真家の露口啓二（つゆぐちけいじ）さんがお撮りになったブロック、風景にもなじんでいて良いなと思いました。でも、今はもうないかも知れませんが。

六つ目がグローバルである。これは札幌農学校出身ですので、それは、国際連盟事務次長となった新渡戸稲造を輩出した農学校の伝統です。

私は以前、新渡戸稲造がブルックス先生の講義を英語で書き取ったノートを北大図書

館の文書館で拝見したことがありますけれども、ものすごくきれいな万年筆の字で英語の授業を丹念に書き取って、それを次の学生のための教科書にするのをやっておられました。ですので、語学力というのは、札幌農学校はすごかったのだろうと思います。語学力だけでなく、その技術がミシシッピで実用され、さらに本人は遼河改修のために招かれてもいます。

そして、私がいろいろ今回読んでいて気がついたのが、石狩川治水調査の中には、世界の科学史と陸続きになることもあるのではないかと思ったことです。

実は、石狩川の治水調査では三角測量が行われています。三角測量というのは大変な人員と費用を要するものだそうで、なかなかそれが全て終わるのは難しかったわけですが、実は1865年に、当時の最先進国ドイツ・プロイセンで測地学の再編成というものが始まって、それが1888年まで続いています。

その前後、日本で何があったのでしょうか。伊能忠敬がエゾ地測量に出発して、伊能図ができあがるのが1821年。松浦武二郎は伊能図を元に東西蝦夷山川地理取調図を作ったとされています。

それで、これ色分けしたのですけれども、緑が北海道に関するところで、赤がドイツ、それでブルーが日本国の動きです。

そうしますと、1873年に開拓使が日本初の三角測量に着手して、苫小牧・鶴川間に勇払基線を設けています。これは去年取材に行きましたけれども、苫小牧の勇武津資料館のところの横の公園に勇払基線というものが置かれています。これが、実は日本初の三角測量だったのですけれども、いろいろな本を見ると、内務省が大三角測量事業開始ということだけしかあまり言われていなくて、ここのところがあまり知られていないなというのを感じました。

それで、世の中というのは、非常に地図というものは大事だから、日本の中で三角測量が進んでいくわけですが、それで、一等三角測量が完了したのは1915年ですけれども、岡崎文吉は1899年に石狩川の河川調査を行う。このときから測量をされていて、その三角測量についての記述も残っているので、大変先進的だったなと思います。

それで、すみません、資料が間違っていますので、レジュメの8ページの5行目を、お恥ずかしいことで1892年に訂正してください。あと、9ページの2行目も、剣岳の最新測量値を2999に訂正してください。お恥ずかしい限りです。すみません。

それでちょっと横道にそれましたけれども、七つ目がエレガントである。

文吉は、農学校入学時にはこのような詩を作っています。やはりものすごく教養が深いといえますか、感覚・感性の素養があるといえますか、本当にすばらしい。あんな計算をしながら、測量をしながら、なおかつこのような情感あふれる詩が作れるところが、それは、恐らくそれまでの日本の教育というものがあったのだろうと思います。

その前に、10歳そこそこで作った七言絶句からしてすごいのですけれども、それは配付資料の方に入れさせていただいております。自分は10歳だけれども、まだ何もできていないとか、16歳にして虚しいというか、まだまだ足りないというような、非常に大きな使命感を持って育ったことが分かります。その使命感というのは一体何なのだろうかと、少年岡崎文吉をそこまで思わせたものは何なのだろうかなど、やはり考えざるを得ませんでした。

岡崎文吉が取り組んだ石狩川ですけれども、非常に曲がりくねった川で、先ほど竹原様のお話にありましたように、それをショートカットすることで今に至っているわけですが、石狩川の長さが268km、信濃川、利根川よりも短いですが、約100年の治水事業でショートカットされた距離というのが、70kmとか100kmということで、結局、それを足すと、元々は日本一長い川だったかも知れない。そんな川は世界のどこにもないということも、今、北見工大にいらっしゃる渡邊康玄先生から伺ったことがあって、これからの100年、100年そうやって石狩川は来たけれども、これからの100年の挙動というのは世界中が注目しているとおっしゃっていました。

その100年間の治水事業によって、1898年、これが岡崎文吉が取り組むようになったきっかけの洪水ですけれども、このとき1,500㎥だった氾濫面積が614㎥になっています。ですから、この間の治水事業でいかに石狩川が治められてきたかということだと思えます。今、空知、石狩、日本一の米どころで、ゆめぴりかやおいしいお米がたくさん作られていますけれども、それは石狩川の治水の歴史でもあると思えます。

そして、これが、先ほど竹原様のお話にありました世紀の大土木工事と言われた生振捷水路の工事の様子です。

私は前に川の博物館で、潜水夫が浚渫のために潜っている後ろ姿の写真を見たことがあったのですけれども、こちらのお写真をお借りすることができて、初めてその人のこの潜水夫を真正面から見ることで大変感激しました。このように本当に多くの方々の人の手によって工事がなされたということが分かります。

ところで、ノブレス・オブリージュの方に戻っていきたいのですが、岡崎文吉は元岡山藩士の長男でした。実は、侍の特性として論理性が高い。それはそうですよね、やはり宮使いですので。緻密である。それは、例えば「武士の家計簿」とかの映画をご覧になったらお分かりになります。本当に緻密です。努力をいとわない。鍛錬してきたから体力がある。そして、下級武士は農村で灌漑や開墾を指導していたということで、土木工事に対して大変親和性が高いというわけで、明治になって刀を近代技術に持ち替えた武士、特に下級武士たちがどうなったかということ、このようにサムライ・エンジニアになったという、これは私が言っているのではなくて、広島大学の名誉教授の三好信浩先生が本に書いていらっしゃる。侍ジャパンの「侍」は漢字ですけれども、これは片仮名で。サムライ・エンジニアが誕生したということです。

そして、日本土木界の巨人と言われる廣井勇も、それから琵琶湖疎水で知られる田辺朔郎も、そして、あの新渡戸稲造もみんなサムライ・エンジニアだったということです。廣井勇先生の『築港』の中に「千年にわたる誉れとはずかしめは、設計の如何にかかっている」と書いています。岡崎の直接の恩師ですので、こういう教えを岡崎文吉は直に受けていた。ご薫陶に接していたと思います。

それから、先ほだちょっと申し上げた、岡崎が調査とかにこだわるあまりに、なかなか工事に着手できないということにいらだった。調査だけで6年かかるというって、でも、地方委員たちは3年でしろというふうに求めたのですけれども、そのときに田辺朔郎が小樽新聞にこういう文章を書いています。「治水工事は、いわば病気を治すというようなもので、測量はすなわち診察にして、設計はすなわち投薬なり」と。結局、測量を、診察することが一番大事だろうと、その大切さを田辺朔郎自らが小樽新聞に書いています。

このようなサムライ・エンジニアですけれども、関口信一郎さんがお書きになった『シビルエンジニア 廣井勇の人と業績』というご本の中に、このようなところがあります。「この貧乏な国において、民衆の食物を満たすことなく、宗教を教えても益は少ない」、廣井は非常に熱心なキリスト教徒でしたので、これは内村鑑三とのやり取りの中から出てきた言葉のようです。「僕は今から伝道を断念して工学の道に入る」。この次が関口さんの言葉です。「先天的に有する数学的才能などに思いをめぐらし、「聖書の精神を生かすための工学」一利己のためではなく、民衆の物心両面の健康な生活のための工学—に生きるという大きな改心に至った」と。これがまさにノブレス・オブリージュではないかと思えます。

そして、廣井勇の同期生である新渡戸稲造が『武士道』の中で、「サムライは保有する武力、武力を行使し得る特権を誇りに思っていたが、同時に孟子が愛の力について教えたことに心から同意していた」という一文があります。つまり、札幌農学校に集まった下級武士の子たちは、辛抱強さ、緻密さ、もちろん優秀だということはありませんけれども、それプラス愛の力というもので新天地の北海道の開発に挑んだということが、非常に場所と時代と人間の能力と北海道というものがマッチしたのではないかなと思えました。

そして、言うまでもなく、それを形にしたのは、工事に従事したこのような無名の人たちです。大勢の人たち。この方々の表情を見ると、何かすごく誇らしげに見えるのです。もちろんものすごく厳しい労働だったとは思いますが、例えば、AIで、この先、人間の仕事の何%かがなくなるとか言われますけれども、そういうことではなくて、やはり人間が仕事をするというのは、AIなんかには負けてたまるかという気が、こういう写真を見ているとすごくします。

これは、初代十勝大橋のコンクリートの支承を入れるときの作業員の方々の表情ですけれども、これもものすごく魅力的で、私は『THE JR Hokkaido』の特集のときに、扉

のページに使わせていただきました。

このように人が大地と取り組んで作ってきたというのが北海道の歴史であり、そこにはノブレス・オブリージュの大きな気持ちがあったのではないかと思います。

御清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 北室様どうもありがとうございました。

それでは、北室様に今一度大きな拍手をお願いしたいと思います。(拍手)

「ほっかいどう学のすすめ」

札幌市立発寒西小学校校長 新保元康氏

○司会 続きまして、基調講演のⅡへと進めさせていただきます。

講演いただきますのは、新たな北海道総合開発計画の策定に関して、「ほっかいどう学」に関する御提言・御助言をいただきました。札幌市立発寒西小学校校長の新保元康様をお願いいたします。

新保様は、北海道社会科教育連盟副委員長として、社会科の授業改善について取り組まれているほか、学校教育への雪の活用に取り組む北海道雪プロジェクトを設立いたしまして、交通環境学習の推進、校務支援システム導入、校務の情報化など、教育現場において幅広い分野でさまざまな取組を行っておられます。

本日は、「ほっかいどう学のすすめ」と題しまして、御講演を頂戴いたします。

それでは、大きな拍手でお迎えしたいと思います。新保先生、よろしく願いいたします。(拍手)

○新保氏 新保でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

今、発寒西小学校の校長をしております。小学校の教師ではありますが、社会科を専門にしています。社会科の指導を続ける中で、「北海道への愛着とか関心が子どもたちに十分に育てられていないのではないか」と思うことがあります。

これはどういうことかということ、小学校の社会科が随分変わったのです。昔は北海道のことをかなりの時間勉強したのですけれども、今は、随分少なくなっています。例えば、札幌の子どもは、3年生、4年生で札幌のことを一生懸命勉強します。その後、5年生で北海道を飛び越えまして、国のことを勉強します。北海道の学習は、少ないのです。

藤田田（ふじたでん）さん（日本マクドナルド初代会長）は、12歳までが大事である。その間に覚えていないと分からなくなるということをおっしゃったそうです。子どもの時に味わったこと、身につけたことは一生忘れないということです。ところが、私たちは、北海道の味を小学生のうちにちゃんと味わわせているのでしょうか？あまり北海道のことを知らないまま大人にしてしまっていないかなと心配になるのです。

先ほど北室さんからご紹介のあった岡崎文吉さん。あのような素晴らしい方が北海道にいたのに、それを勉強していない。もったいないだろうということです。

去年の8月末に台風で北海道は大変なことになりました。このスライドは日勝峠の様子です。今日お集まりの方の中にもきっと災害対策に汗を流した方がたくさんいらっしゃるのではないかと思います。北海道の東西が行き来ができなくなるぐらいの大災害

でした。

しかも、新聞を読んでいてびっくりしました。「自転車と歩きで、熊と闘い 調査」と書いてありました。日勝峠の被害を調査するために帯広開建、室蘭開建、そして企業の皆さんが山に入ったのです。熊に遭遇する恐れがあるため山中泊はせず、崖崩れの激しい日勝峠を、上りは自転車を担いで徒歩で調査、下りは自転車で帰ったそうです。これこそ、北室先生のおっしゃっていた“ノブレス・オブリージュ”だと思います。「ヘリコプターで調査すれば良いのでは？」と私のような素人は考えます。でも、それでは覆道の中など分からないのだそうです。こうしたご苦勞を知らない私は、本当にびっくりしました。

こんな努力があって、北海道の東西が結ばれていることを学校の教師は何も知らないです。私の仲間に社会科の先生がたくさんいますけれども、今の社会科の若い先生は新聞をあまり読まないようです。スマホでちょっと見て終わりです。「新聞ぐらい取って勉強しましょう」とよく言うのですけれども、なかなか読みません。そうすると、熊と闘いながら台風被害を調査しているというようなことは多分知らないのです。教師が知らなければ子どもも当然知りません。

「秋の味覚に大打撃」、これも新聞に載っていた記事です。十勝平野の被害は甚大で回復に十数年かかると報じられていました。十勝平野は食料自給率1,100%。十勝は日本の食料基地というふうに教えます。しかし、この台風で、十勝平野の回復に十数年かかるという意味を教えることのできる教師は本当に少ないのではないかと思います。帯広・十勝の方でも教えていないかも知れません。

この十勝の畑の写真を見てください。これを見て、多くの教師、子どもも、「自然が豊かだね」と表現すると思います。しかし、これは自然でも何でもなくて、人間が作った畑であり、土です。

これは、十勝の土質を表した図です。十勝というのは火山灰地なのですね。火山灰というのは当然痩せている。その火山灰の土地を肥沃な土地に、何十年もかけて変えていったのです。そういう歴史がこの陰に隠されているわけですね。しかも、単なる火山灰というだけではなくて、十勝には湿地もあったようです。だから排水もしなければならぬ。火山灰は酸性ですから、土質の改良もしなければならぬ。ここに書いてあるように、「このように十勝の土壌は130年かけて、十勝農業を支える大きな原動力となった」のです。長い長い年月をかけてやっと肥沃な大地に作っていったのです。教師も子どもも、そうした北海道の歴史を知らないわけです。

そうすると、畑の写真を見ても、ただ単に自然が豊かで北海道らしくて良いねという話にしかありません。今回の台風では、長年の努力で作った肥沃な表土が全部流されてしまって大変なことになったのですが、その意味を子どもたちに話すことができないわけです。

これもびっくりしました。今年の秋には日勝峠の道路が復旧するのだそうですね。す

ごいスピードでないかなと思います。こうした努力も知らないと思います。この道路が壊滅的に壊れた写真を見たときも驚きました。こんなに壊れた道路をどうやって直すのでしょうか。トンネルを別に掘るのでしょうか？

こうした日勝峠の被害について、職員室で若い先生たちと話し合ったことがあります。そうしたら、若い先生は、「校長先生、日勝峠ってどこですか」と言うのですね。知らないのです。札幌にいと道東の方に行く機会も限られているのでしょうか。日勝峠の名前も本当に知らない。これが現実です。

これは昔の石北峠で観光バスが雪解けの泥道の中で立ち往生している写真です。私はこの様子がよく分かります。私は昭和33年生まれです。昭和40年代もまだこのような感じでした。昔はこんなヒドいところに一生懸命道路を造ったのです。しかし、日勝峠の場合、開通して50年も経つか経たないかのうちに今回壊されてしまった。北海道の自然環境は本当に厳しいですね。そこに私たちは道をつけたり、線路をつけたり、いろいろなインフラを整備して頑張ってきたのです。それを今は学んでいない。教師も知らないのです。

これは、北海道広告業協会さんが去年新聞に出した広告です。このコピー「日本は小さい、北海道は大きい」は素晴らしいですね。そして、広告の地図には、北海道の中に15個の県が入っています。15個入ってもまだすき間だらけですので、もっともっと入るわけです。このコピーのとおり「日本は小さい、北海道は大きい」。本当にそのとおりだなと思います。北海道は本当に大きい。それなのに、我々は北海道を学ばなさ過ぎるのではないかと思うのです。

6年生がこの金曜日に卒業していきました。半分ぐらいが袴を履いて卒業します。きらびやかな子どもたちの姿を見ると、本当に豊かな時代になったと思います。しかし、その豊かな子どもたちは北海道のことを十分知っているのでしょうか？

簡単な調査をしてみました。「自分は北海道のことを知っている方ですか」と6年生に聞きました。「知っている」「まあまあ知っている」を合わせて46%。「自分は知っている方だ」と自信のある子どもはおおよそ半分と言えるでしょう。

次に、「十勝平野はどのあたりですか」と聞いてみました。私の予想より正解率は高く、87%の子どもが正しく答えられました。私、もっと知らないのではないかなと思っていましたが、意外と知っていました。「流氷は主にどのあたりに来るか」、これは大体8割ぐらいの子が正解でした。

次は、「北海道のことについて書いてあります。正しいものに『○』、間違っているものに『×』を付けましょう」という質問です。

「北海道は日本の中でも農業の盛んなところだ」「北海道でも弥生時代から稲作が行われるようになった」「北海道の鉄道、港、道路などは江戸時代から急速に整備された」「北海道には台風は来ない」「札幌より東の十勝の方に雪がたくさん降る」「世界で初めて人工的に雪の結晶を作ったのは北大の先生だ」「アイヌの人たちは自然を大切に暮ら

していた」「あと5年ぐらいで札幌まで新幹線が来る」「北海道の人口はこれから増えていく」「排雪は除雪の80倍お金がかかる」これらに○×を付けてもらったのです。

子どもたちの9割以上の正解があったのは、「農業が盛んだ」「アイヌの人は自然を大切にしていた」でした。正解が5割以下だったのは、「札幌より東の十勝の方が雪はたくさん降る」「あと5年ぐらいで札幌まで新幹線が来る」「人口が増えていく」等でした。「北海道の鉄道、港、道路などは江戸時代から急速に整備された」に「×」と正解した子は35%でした。少ないですね。「排雪は除雪の80倍お金がかかる」もあまりできませんでした。札幌市では、除雪の授業を4年生で必ずやることになっています。除雪排雪のことも学んでいるのです。もうちょっと正解するかなと思ったのですけれども、まだまだ理解不足でした。

6年生の北海道に関する知識は、この程度で良いのでしょうか？ この子たちは18歳になったら選挙権を得ます。たった6年後です。北海道を十分に知らないで大丈夫なのだろうかと心配になります。日勝峠も知らない若手教師はこれからますます増えるでしょう。当然、北海道のことを十分に教えられないわけですね。北海道は大き過ぎる。そして、北海道を学ばなさ過ぎると思います。

北海道に関する学習は少ないです。昔は、『わたしたちの北海道』という副読本があって、北海道開発についてもたくさん勉強していました。それから、社会科の学習時間が実は大幅に減っているのです。以前は1年生から社会科を学びましたけれども、どんどん減っています。減った分が、生活科や総合的な学習に変わったのです。しかし、生活科や総合的な学習は少し停滞ぎみだと感じています。社会科教科書の都道府県に関する記述量、副読本での取り扱いも減っています。

昭和46年の『わたしたちの北海道』を見ますと、ほぼ1年間、北海道についてびっしり勉強していたことが分かります。昭和46年ですから、第3期北海道総合開発計画のお話が掲載されています。例えば、「苫小牧港に第2工業港を造る」という話が載っています。開発、成長がみんなの関心であったという時代背景もあるでしょう。

道民生活の目標も掲載されています。「1人当たり6畳以上の住宅を持てるのは、今は48%だけれども、昭和55年には100%にする」「電話の普及は、7%を70%にしたい」「乗用車の所持率は、4%を25%にしたい」などなど目標が具体的に書かれています。

私も子どものころ、この副読本を使っていました。先ほど課長のお話にもあった篠津地域での泥炭地開発、これについても詳しく載っていて、非常に興味深く勉強したのを覚えています。

これが今の4年生の副読本です。4年生ですが、『わたしたちの札幌』とあります。3年も4年も今『わたしたちの札幌』なのです。昔は3年が「札幌」で、4年が「北海道」だったのです。今の副読本にも北海道のことは入っています。でも、内容が昔に較べると薄いのです。

これは、学習指導要領の扱い上やむを得ないことです。しかし、全国の仲間に聞くと、県単位の学習は、結構残っていることが分かりました。県単位の副読本が今も作られているのです。

これは愛知県の副読本です。『輝く大愛知』です。4、5、6年の3年間で使うようになっています。そして、非常に内容は濃い。地域の発展に尽くした人々の事例は、三つも取り上げられています。「水を治める」「用水を引く」「港を開く」と三つ載っています。B5版で138ページの分量があります。交通の記述は3ページあり、「リニア新幹線が来る」と書かれているわけです。

これは岩手県の副読本です。やはり4、5、6年の3年間で学習するようになっています。内容はやはり豊富です。大きい版でページ数も非常に多いです。県内の開発の事例をたくさん載せているのですね。

私たちの北海道にも子どもたちに伝えるべきものがたくさんあるのではないのでしょうか。先ほど課長の紹介してくれた新篠津の泥炭と格闘した先達、北室さんのお話にあった暗渠のお話はすごいですね。「農業における排水の発明は工業における蒸気機関の発明と同じ」という、それぐらいのすごいことを北海道でやり遂げたわけです。これによって北海道は日本の食料基地になったのです。これを子どもに教えるべきだと思うのです。こうした歴史を知らずに本当に選挙権を行使することができるのか…。大げさかも知れませんが、そんなことを考えているわけです。

まとめます。北海道は他県15個分以上の広さです。極寒多雪の地に生き、開発する苦勞と知恵がありました。それなのに現在の学習はわずかです。これでは本当の道民意識は育たないのではないのでしょうか。18歳で選挙権を得て、道議会議員を選ぶためには、ある程度の北海道に対する知識がなければダメなのではないのでしょうか。「ほっかいどう学」を導入し、もっと学ぶ必要があります。

「ほっかいどう学」の推進には、いろいろな方法があると思います。カリキュラムを作る。優良な「ほっかいどう学」の実践を表彰する。新たな副読本を作る。児童向けに「ほっかいどう学」のHPを作っても良いでしょう。各小学校の図書館に「北海道」に関わる本を置くだけでもかなり違うかも知れません。

教師研修も重要です。実は私が初任のころ、もう三十数年前ですけれども、開発局がバスを出してくれまして、中山峠の水源地帯からずっと豊平川を下って石狩川の河口まで現地でご指導いただいたことがあります。非常におもしろかったです。あのような研修が必要です。現場で研修するのが非常に大事なかなと思います。

JRの特急に置いてある冊子『THE JR Hokkaido』には、「ほっかいどう学」で取り上げたい素晴らしいお話が毎月巻頭に載っています。この北室さんの巻頭特集をいつも楽しく読ませていただいております。今日は、この後、お話もできるということで本当に楽しみにしております。

私の話はここまでにします。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 新保先生、どうもありがとうございました。

それでは、御来場の皆さま、新保先生に今一度大きな拍手をお願いします。(拍手)

それでは、引き続きまして、パネルディスカッションへと進めさせていただきます。
新保先生におかれましては、パネリスト席への移動をお願いいたします。

それでは、パネリストの皆さま、コーディネーター様、御登壇よろしくをお願いいたします。

「ほっかいどう学」の展開に向けて

コーディネーター

- ・一般社団法人北海道開発技術センター理事、地域政策研究所長
原 文 宏 氏

パネリスト

- ・ノンフィクションライター、編集者
北 室 かず子 氏
 - ・国立大学法人北海道教育大学教育学部准教授、同学校・地域教育研究支援センター 生涯学習・地域連携部門長
今 尚 之 氏
 - ・札幌市立発寒西小学校校長
新 保 元 康 氏
-

○司会 それでは、御参加いただいておりますパネリストの皆さまを御紹介させていただきます。

先ほど御講演いただきました北室かず子様でございます。（拍手）

次に、北海道教育大学教育学部准教授で、同学校・地域教育研究支援センター 生涯学習・地域連携部門長の今尚之様でございます。（拍手）

次に、先ほど御講演いただきました新保元康先生でございます。（拍手）

そして、コーディネーターを務めていただきますのは、一般社団法人北海道開発技術センター理事で、地域政策研究所所長の原文宏様でございます。（拍手）

それでは、ここから先の進行につきましては、コーディネーターの原様に、よろしくお願ひしたいと思います。

○原氏 今、御紹介いただきました北海道開発技術センターの原でございます。今日は、パネルディスカッションの方の進行をさせていただきますけれども、僕が進行させていただくという一つの背景は、多分、新保先生と、今日も発表ございましたけれども、もう10年以上、特に雪、除雪とか、それから交通、環境、そういったことを、特に社会資本整備と関わる部分で、学校教育の中でどう教材として使っていけるかというようなことをさせていただいているということが大きな背景かなと思っています。

僕自身は、土木の、元々は橋の設計をやっていて、今、公共交通とか、モビリティの計画を中心にやっておりますけれども、いろいろ自分自身がそういう土木のエンジニアとして、今は計画論をやっているわけですが、やっているとやはり自分自身のやっ

ていることに限界を感じるというか、計画論というものを突き詰めていくと、結局、最後は政治と教育かなというところに、あるとき僕自身が行き着いたときがありまして、たまたまそのときに新保先生とお会いしたという中で、その後はいろいろな形で学校教育とさまざまな取組をさせていただいている。

なぜ教育と政治かという、政治も、さっき先生がおっしゃいましたけれども、18歳の選挙権というところがあるように、全ては教育に帰着して、例えば、社会資本整備をいろいろな形で進めていったとしても、それを実際に予算をつけて決めるのは政治ですし、その政治家を選ぶのは市民であり国民であり地域の住民ですし、選ぶ尺度というのは、なぜ選んだかというところは一人ひとりが持っている知識とか、経験とか、そういったものの中から選ばれてくるわけで、一見、社会資本整備というものと教育というものはすごく両極端なところがあるような気がしますが、実は、最も重要なことなのではないかなということで、そういった意味で、今回、北海道の新たな北海道総合開発計画という、いろいろなところの国の機関で総合計画、県でも作ると思いますけれども、どちらかというとハードな官庁の総合計画に、教育というのが初めて入ったということは極めて画期的なことだなというふうに僕自身も思いますし、これからのパネルディスカッションというものは、非常に私自身も楽しみにさせていただこうかなというふうに思っています。

時間も1時間ぐらいしかないものですから、今日は、もしかすると消化不良かも知れませんが、これキックオフということですので、これスタートということで、今後に期待してもらえたら良いなと思います。

今日は大きく二つのテーマで皆さんと議論させていただこうかなと思っていて、一つは、まず最初に、もう既に皆さん、お二人の先生方には、いろいろな形の北海道の魅力についてお話しいただきましたけれども、改めて、今先生も含めて北海道の魅力のすばらしさという、そこについてお一人様ずつお話しただいて。

もう一つは、まさに今日のテーマですけれども、これからの「ほっかいどう学」の展開に向けてということで、これもキックオフということで、私も事前にいろいろ意見交換をさせていただいているのですが、なかなか、最初、「北海道学」と漢字で書いてあって、今日は「ほっかいどう学」と平仮名と漢字で書いてありますが、実際、それでは「ほっかいどう学」って何と問われると、なかなか掴みどころがないところもございます。その辺のことを、今日の議論をスタートに、徐々にきちっと骨格を固めて、そして「ほっかいどう学」というものを、北海道の総合開発計画を通じて、北海道の中で根づかせていけたら良いなということもございます。その二つ、皆さんと議論していけたらというふうに思っております。

まず、北海道の魅力のすばらしさというか、そこについてこれから3人のパネリストの皆さんと話をしていきたいと思いますが。一番最初に出てきましたが、地域に対する愛着というものが、どういうふうにでき上がってきて、それから北海道の魅力とかすば

らしさに、どういったふうにつながっていくのかというようなことを、これからお一人10分程度ずつ、北室さん、今先生、それから新保先生、その順番でお願いできたらなと思いますので、まず、トップバッター、北室さんということで、よろしく願いいたします。

○北室氏 先ほど、近代のとば口ということで、明治時代の技術のことをお話しさせていただきましたが、配付しています寒地土木研究所さんの御協力での写真をプリントアウトしても良いということで、非常に私がずっと初めて見たときから惹かれ続けている写真をプリントアウトしていただきました。これは、初代十勝大橋のロッカー支承の配筋ということで、初代十勝大橋というのは、これは昭和の技術の話になるのですけれども、昭和16年に完成して50年あまりを経て平成8年に解体されました。ところが、この橋体コンクリートが非常に良い、十勝川の川砂と札内川の砂利で作られているということで、基準も、当時最高の許容圧縮応力度というものを満たして作られているために、50年間にわたって風雪にさらされても大変健全だったということでした。

それで非常に興味深いのが、そのコンクリートをこの先200年間保存して、そのコンクリートの劣化などについて、ずっと調べていこうということが今も続いているというようなことで、そんなことはやはり私たちはなかなか取材するまで知らなかったのですけれども、それは非常に私たちみんなが共有していくべきものではないかと思えます。

先ほどの廣井勇は、コンクリートで非常に有名な人ですけれども、そのときもコンクリートは、この先どれぐらいの強度を保つかということの試験がずっと続けようということで始めましたが、今現在もこのように続いているということは、すごく意味があることで、2枚目のアップの写真が、2014年にここの部分から切り出して、それをまた調べると。そんなことは全然知らなかったのですよね。それを北海道での非常に寒さの厳しいところで、水が凍結したり融解したりする過酷な環境の中でコンクリートがどう劣化していくかということは、世界に対してもものすごく意味のある実験だと思いますし、最初にもものすごく良い状態で作られた橋がなければできなかったことで、そういうふうな物語、これは事実に基づくしっかりとした物語を伝えていくということで、社会や子どもたちが、北海道を支えている社会資本を見る目というのはものすごく深まるし、自分たちがこれからの社会を担っていく上で、どんな参画の仕方があるのかということへのヒントにもなるような気がいたします。

昭和の技術といいますと、やはりちょうどこの3月で開通1年を迎えた北海道新幹線、私はJRさんの車内誌の仕事をさせていただいている関係で、青函トンネルの方の取材にも行きましたけれども、やはり青函トンネル工事というのは世界に誇る昭和の大工事、水の道をふさいで普通トンネルは作るそうですけれども、陸上のトンネルと違って、青函トンネルって上に水の道どころか水の塊があるわけですから、それをどういうふうにして克服していくか、何度もの出水の事態にも遭いながらも、それをなし遂

げたという。そういった人と技術の遺産というものが北海道にはたくさんあるのではないかと思います。

また、人物ということでは、去年、開館100年を迎えられた旭川の川村カ子トアイヌ記念館の初代館長の川村カ子トさんという人は、実はものすごい天才的な測量技手だった。それで、信州の天竜峡あたりの大変急峻な崖のところの測量をなし遂げたという人だそうです。私は、天竜峡のあたりは、サイクリング部だったので自転車で走りまわりましたが、本当にとてつもなく急峻な感じで、そんなところをアイヌ民族の川村カ子トさんが率いて、測量界でも天才的な力を発揮した。そういう物語がたくさん眠っている。私が知らないだけかも知れませんが、それを事実に基づいて再構築して、物語性をきちんと発信していくと非常に感動できると思いますか、未来に対するエールになるのではないかなと思いました。

以上です。

○原氏 ありがとうございます。それでは、続いて今先生の方に行きましょう。

○今氏 座ったままで失礼いたします。北海道教育大学におります今 尚之と申します。

私は、土木学会という学会に所属して、土木史や土木遺産についていろいろ勉強させていただいております。また「選奨土木遺産」という制度が土木学会にありまして、その選定に関わる評価なども研究させていただいております。また、大学では、生涯学習に関係する専門職養成講習などを担当させていただいており、学校以外で組織的に行われる学びを総称する「社会教育」についても勉強させていただいております。

そのようなことから、今日、皆さんの目の前でお話しさせていただけるのかなと思います。

いただいたテーマが「北海道の魅力」ということなのですが、「北海道の魅力」、私自身から見たら何だろうかなという、これは、もう「てまひま」すなわち「労力と時間」がギュッと詰まって、現在私たちが住む環境を作ってきた、いろいろな人の「てまひま」があり、それが今の北海道の姿を作っていることが大きな魅力と思っています。

そういうことはどこの地方でも同じでしょうと言われるでしょうが、やはり北海道が置かれている環境、例えば、四方を海に囲まれている。また、日本の中でも、いえ、日本国内だけではなく、世界の中でもいろいろ比べてみますと、冬の間、これだけの人口のある都市にこれだけの雪が降る。そういったところを見てもかなり厳しい自然環境、そういった中で人々が生活を行っているわけですが、そういう厳しい自然環境の中に人間の居住地を作ってきたわけですが、そういう厳しい環境の中で開発を進めてきた人々の歩みの豊かさとか、物語などがとても豊かであることは、北海道の魅力であると感じています。

地理学には、エクメネという言葉があります。これは「人間の居住地」という意味です。生活する、居住する、そういったような言葉として使われますが、このエクメネという言葉は、ギリシャ語の“o i k o u m e n e (オイコンメン)」、人が居住している

世界、地域というものに由来しています。言ってみれば、人類が地球上を住み得る土地として、自然に働きかけを行い、自然を改良してきた。人類は自分たちの生活の周辺に対して認識しながら、その改造に向けた働きかけを行ってきたということを示すものと言えます。

そのようなことを世界史的に見ていけば、例えば、オランダもそうでしょうし、街全体がそのまま世界遺産になっているようなベネチアもそうですけれども、自分たちの周りの自然と向き合いながら、あるときはそれを克服し、あるときはそれを上手に利用しながら、自分たちの住む居住地、エクメネを拓げてきたのが人類の歴史であり、物語ではないかと思います。

私どもの大先達の1人に小川博三先生、もしかしたら、年配の方の中には学んだことがある方いらっしゃるかも知れませんが、北大の交通計画の始まりの先生でございます。その小川博三先生はこういうことを述べておりました。「開発は20世紀から始まったものではもとよりない。人類は地球上に生まれ出たその日から、何らかの形で地上を開発し続けて今日に至る。地味ではあるが、たゆまざる努力を持ってその住む環境を保全し、拡張し、豊沃にして今日に至ったことであろう。もちろん人間の営みは常に成功してきたわけではない。時には失敗し、取り返しのつかないような失敗も起こしてきた。試行錯誤が人間の開発の歩みそのものだったということができる」ということを述べています。

こういう歩みというものがギュッと詰まっている、そういったような魅力を持ったのが北海道であると思います。また、本日、廣井先生のお話とかも出ておりましたけれども、廣井先生のととても親しい、廣井先生が亡くなられたときに弔辞を読まれたのが内村鑑三先生ですが、先生の講演録の中に「デンマーク国の話」というのがございます。

この講話は、デンマークがプロシアとの戦争によって国土の大半を失い、気候の厳しいユトランド半島とその周辺の島諸のみが国土となってしまった。残された国土で国を復興させるために、デンマークの人たちは国土開発に取り組み、荒れた土地に植林し、灌漑溝を整備することに取り組み、そして、その結果、豊かな農業国として復興をなし遂げた。こういうお話をされているわけです。

内村先生は、敬虔なクリスチャンであり、それを信仰というものに最後は結びつけ講話を締めくくるわけですが、その途中途中で、そういう開発、そしてまた、そういう事業を興していくことの必要性とともに、またそれが人間の営みとしてとても高貴なものであるということを訴えています。

その内村先生の話から、やはり私たちが学ぶことは、国づくり、そして国民を富ませるためには、内発的な開発が不可欠であり、そのためには技術の開発と適用、そして人々が信念を持ち、技術に誇りを持って事業に取り組みということが必要であり、これは教育の必要性というものとも重なってくると私は思います。

よく「北海道は歴史がないよね」と言う方がいらっしゃるのですが、私は、その考え

方ってどうかなといつも思っています。ただ時間が長ければ歴史が長いというものではなくて、むしろどれだけ「てまひま」をかけているのか。たとえ短い時間であっても、問題に向かって一所懸命考え、いろいろなことを思案し、試しながら、そして問題を解決していくという、そういう積み重ねというものが歴史であるし、また、それが地域の、その土地、土地の魅力というものにつながっていくと考えています。

何ら手をかけずに、ただ黙っていたところは、残念ながら魅力的な土地ではないと思います。それは、私たちがその土地から学ぶことがない、物語から感動することがないからだと思います。でも、北海道はそんなつまらないところではなく、その土地、その土地でさまざまな苦労があり、工夫があったわけです。物語の豊かさと、そこから多くのことを、いくらでも学べる土地が北海道ではないでしょうか。近代という短い時間で多くのことにチャレンジしてきた。そういったようなことにも、私は北海道の魅力というものを強く強く感じています。

また、北海道には近代の開発だけではなくて、古代から、縄文時代のお話もありますし、そういう意味からいうと時間の長さもあります。視線を古くの方に向けてまいりますと、縄文時代のお話とかもいろいろありますが、例えば中世、津軽海峡を挟んで北海道、そして北海道外との人々の交易の営みの中に「館（たて）」というのが作られています。函館空港の側には、重要文化財として文化財保護の対象にもなっている「志苔館（しのりたて）」があったりとか、江差、上ノ国方面にもいくつかあるのですが、その中で、上ノ国町の「勝山館（かつやまだて）」から「夷王山」の一角は、現在発掘が進み、中世都市として注目されていますが、都市計画史から見ると古代ギリシャのポリスのような古代の都市のつくりとほぼ同じような形で、海岸線からある一定距離を置き、斜面地を上手にを使って外敵から街を守り、人々が暮らしているわけです。異なる民族が接したフロンティアならではの遺跡だと思います。そういったようなことは、意外と知られていなかったり、また、皆さん関心がなかったりする。それでは、北海道としてもったいないと思っています。昔から人々は、海に囲まれた北海道という島というものに対して、いろいろな形で関わりながら住むところを拓げてきた。そういったような歩みというものを今一度見直していくということが必要でしょうし、そういうことが北海道の魅力の再発見になり、魅力をまたさらに倍増していくのだろうなというふうに思っています。

もう一つなのですが、先ほど土木遺産のお話をさせていただきましたが、北海道の場合、特に厳しい気候環境であったりとか、社会環境も難しいところが多いと思います。さまざまな開発に関わる施設や構造物を作るに当たっても、そこで働く人たちを集めるだけでも相当大変な苦労があったと思いますし、また、厳しい環境であったり、交通が不便な中で作っていくという問題、そういったようなさまざまな課題を克服していく中で、やはり土木技術による計画的、組織的な土木事業の実施というもの、そういったようなことは、道外に比べると、北海道ならではの特徴を見いだされると思います。

そういう北海道の特徴を、土木遺産というものを通して見ていただき、北海道の魅力を感じてもらいたい、理解してもらいたいというのが今の私の気持ちです。

話があちこち飛びすみません。北海道の魅力と言われたら、私は、四方を海に囲まれてきたそういう環境の中で、自然環境や社会的な環境を含めながら、人々が「てまひま」をかけながら今の北海道を作り、暮らしてきた。そして、特に近代以降、近代の科学技術というものを使い、非常に短い時間で多くの努力や創意工夫をして、この北海道を開発してきた。そういう北海道の物語そのものが北海道の大きな魅力の一つのように思っています。その魅力を今後引き継いでいくのが、若い世代の人たちであるし、その若い人たちが学ぶために必要な情報を提供したり、また一緒に学んでいくというスタイルが、上の世代や年配の方々にも必要だなと思っています。

最後ですが、これまでに開発されてきた北海道は、ただ物を作って終わりではなく、それを維持してきた人たちがいるということも忘れてたくないと思います。ダムを作りました。作って終わりではないわけです。それを管理する。水路も作りました。それで終わりではないわけです。それを維持管理していく。そうやってお米を作っていく、畑を守っていく、また、港を守っていく。道路を守る、川を守り、水害を防ぐ。そういう目に見えない、地道な維持や管理というところにも一人ひとりが苦勞し、「てまひま」をかけてこの北海道を作ってきたということも北海道の魅力だし、忘れてはいけないと思っています。

長くなりましたが、私の方からは以上でございます。

○原氏 今先生どうもありがとうございます。まず、3人とも終わりにしましょう。新保先生、次、お願いします。

○新保氏 北海道の魅力は、これ（『THE JR Hokkaido』）に全部載っていると思います。私、本当に大ファンでございまして、以前は、札幌駅でホームライナーに乗ったら、これが備え付けてありました。北室さんの巻頭特集を大体読み終わったところ手稲駅に着くのです。非常に良かったのです。「持ち帰り可」でしたので、うちにこれたくさんあります。特集の中に「樽僑と呼ばれた男たち」というのがありました。「華僑」に対する「樽僑」。小樽の豪商は世界的な力を持っていたのですね。私、小樽出身で潮陵高校の卒業なのですが、潮陵高校の横には樽僑の一人でもある野口家の和光荘がありました。小樽の商売人は華僑と張り合っていたなんて驚きました。北海道には物語が詰まっているなと思います。

「天塩川早春物語」という特集も感動しました。私の祖父が冬の終わりに山に入って、次の冬の暖房用の木を切って引っ張って下ろしてくるわけです。そうしたら、まき屋さんが来て、電動のこぎりでその木を切ってくれました。さらに細かくするのは私たちの仕事でした。実際にやりましたので、本当に懐かしい。

玉葱の札幌黄の特集も興味深く読ませていただきました。JRの冊子の中に非常に知的な、そしておもしろい北海道が詰まっているのです。こんな冊子は他のJRにもある

のでしょうか？

○原氏 それぞれ車内誌は各JRで出していますけれども、少なくとも毎号出てきますからね。ずっと北室さんですから。こういうのはないと思いますね、多分。

○新保氏 本当にすごい冊子だと思います。

さて、子どもが北海道の良いところを何とと思っているか、自由記述で書かせて調べてみました。6年生、68人に書かせました。そこに良く出る言葉を拾ってみました。

まず、「自然が豊か」「自然が多い」、それから「おいしい」、これは大体両方とも68%前後の子どもが書いていました。「広い」と「災害が少ない」というのも結構ありました。「雪」もありました。「優しい」「土地が安い」「住みやすい」「アイヌの文化」、これらに対して良い感じを持っているのが多いのですね。これらは子どもの目線から見た良いところですよ。

こうした感想に出てきてほしいのだけれども、出てこない言葉もあります。歴史に関する記述はゼロでした。北海道は、先ほど今先生のお話にもありましたけれども、歴史はないと思込んでしまっているのかも知れません。本当は濃密な歴史が詰まっているのに、それが意識されていないのかなと思います。それと活躍した北海道人というのはあまり紹介されていないのですね。わずかにあったのは、タカアンドトシとファイターズ…。それも良いですけども…少し物足りないですね。

それから、第二次産業、第三次産業の記述もありませんでした。世界に関する記述もほぼゼロ。観光に関する記述はゼロ。未来に関する記述もありませんでした。「北海道の未来は開けている」ということを書いてほしいのですけれども、残念ながらそれはなかった。書かれないものの中に、私たちが「ほっかいどう学」として取り組むヒントがあるのではないかなと思いました。

以上です。

○原氏 ありがとうございます。

北海道の魅力という中で、北室さんおっしゃるように人と技術、そういった遺産があって、そういったものをうまく、そこにまた物語性がある、それは非常に尊いことだと思います。今先生のお話したというようなことで、最終的にはそういった物語がその土地に全部あって、それが魅力だと。そういったことは学校教育なり社会教育の中で指導していただいても良いのですけれども、なかなか今、僕を感じとしては、僕も土木技術者としてできる限り、北室さんとか、今先生のおっしゃるようなことで、全体的に潜在化していて、なおかつ土木の技術者というのはあまり言いたがらないということはないけれども、そういうのをあまり言わないです。しかも、道路とか橋とかならともかく、下水とかは、できた後は何も見えませんから、マンホールしか。だから、あまりそういうことというのは意識されない。古いものは、さっきの先生みたいな、まだ舗装されていない道路で、ああいう状態というのは、僕の人生の中でも、舗装率が一桁から90何%まで、僕の人生にちょうどありますから、道路が僕の人生で良くなったという

のはすごく身に染みて感じるのですけれども、僕の娘たちは、少なからずほぼ100%舗装道路ですから、彼らにとっては当たり前という。そういう状況というか、そういったことを含めて、その背景にある人と技術みたいなものを物語みたいな、それがまさに北海道の魅力だとしたときに、北室さんなんかは、こういう一つの使命でもってどんどん掘り下げていって、それを外に出していったりするのですが、社会全体の中では、まだどうしても小さな存在かなと思うのですけれども、魅力をより外に見せていくというか、そういった部分で、何かご覧になったポイントみたいなことというのはどうですかね。

○北室氏 今、今先生が、上ノ国町の勝山館から夷王山が古代ポリスとおっしゃいましたけれども、びっくりしたのですけれども、ぜひ今すぐにでも取材させていただきたいという感じですが、やはり勝山館の中世から続いているというのを、北海道遺産でもありますけれども、なかなか難しく、正直言って地味だなと思っていて、それを古代ポリスという、このパラダイムの大転換というのは本当におもしろいですよね。えーって、思わず。えっ本当とか、何言っているのというような、そういうふうなコンテンツの提示の仕方というのを、これは、でたらめだったらダメですけども、今先生がおっしゃっているのですから、その根拠というのをぜひ伺って、それをきちんと順序立てて説明していくと、ものすごく力強いものになって魅力的なものになると思います。

それから、やっぱり私が思うのが、写真の力の強さということで、北海道は、近代以降に開発が非常に大きく進んでいったということで、全てが写真によって国が撮っているという、そういう強みはものすごいあると思うのです。多分、土木の皆さんは、この写真のすごさというのをあまり認識していらっしゃらないかも知れませんが、人物が写っているというものは、人は間違いなく引きつけられて、この時代、昭和6年とか8年とかという、人の顔を見るだけでも、えーっと思うのですよね。輝いた顔をしている。この顔の表情、この人の表情を一つ見ることで、昭和の日本人というのはどんなツラ構えで生きていたのか、どんな心持ちで日々の生活をしていたか、仕事に携わっていたかということが、私たちにビビッと伝わってくる。これを国が残しているということはすごいことなので、こういう写真を発掘して、それを私は、今の今先生のようなコンテンツによって再構築していったら、ものすごい力のあるものができるのではないかなと思います。材料は山のようにあるということがよく分かりましたので。

○原氏 新保先生も昔、本当に1枚の写真だけで授業をやっていましたよね。

○新保氏 そうですね。本当に北海道の写真ってすごいのがありますよね。さっきもドロドロの石北峠でしたけれども、旭川でまちの中で車が雪解け時期に埋まってドロドロになっている写真も見たこともあります。道路ができたときに鼓笛隊が街中でパレードしている写真も授業で使いました。写真の力は大きいです。おもしろい授業ができます。

○原氏 今先生のまとめの中に書いていますけれども、アーカイブを含めて御意見を。

○今氏 写真が持つ訴求力というのもありますし、今お話にもあったように、実は20世紀というのは動画、動く映像の時代でもあって、私たちにとっていろいろなことを、視覚的な記録として見せてくれます。しかし、それらの記録がどこにあるのかが分からないというのが現状で、残念なことです。

学校図書館の話の新保先生されていましたが、ようやく国の法律が変わって、学校に司書を置くことが2年ぐらい前からでしょうか、努力義務になりました。それまでは、学校図書館というただ本が置いてあるだけで、そこに専門の職員もないのが現状でした。その中でも、道内で見ると旭川市が非常に進んでいまして、学校司書の配置や専門性の獲得に積極的に取り組んでいます。そこで、大学と共催の研修会や学校訪問をさせていただいているのですが、一昨年ほど前に、先ほど新保先生がおっしゃられた（JR）車内で配られている冊子を使った授業支援を見学しました。

冊子を提供した理由を聞きましたら、「郷土学習の資料としていろいろな情報が書かれているし、信頼おける内容である。でも、本屋さんにはない。しかし、そういう冊子類を学校図書館に置いておくと郷土学習で活用してもらえる」とお話しされました。その授業は、旭川のまちの特徴をまとめながら、郷土旭川の良さを理解することと、資料を読み・まとめ・表現する力を育てるものでしたが、冊子で紹介されている人物を取り上げながら、子どもたちは旭川の発見と活躍する人の思いに触れていました。そういう授業を先生と専門職員の方が一緒になって作っていく姿は素敵なものですが、しかし、これは、先生や専門職の学校司書の方が冊子の存在を知らなければ、資料として活用されず、その人物を通して地域の素晴らしさ、人の素晴らしさを子どもたちは知らないで終わってしまうのです。では、どうすればこういった資料の存在を知ってもらえるようになるか。ということが課題になると思います。

先ほどの写真や動画もやはり同じです。どこにどういう写真があるのか、それをどのように皆さんが使い、物語っていくのか。そのために、北海道の開発を捉えた、記録した資料のノウハウを共有していくのか、その環境整備が必要となってくると思います。

今は、ありがたいことにデジタル技術が進んでいますし、AI技術等が進んで来ています。そのため、こういうイメージの写真が欲しいなど、自分でスケッチとか絵を描いたら、それに近いようなものを検索システムが探してきてくれるとか、あとは、参加型、先ほど紹介していただいた写真なども、例えば、これを見て、うちのおじいちゃんが写っているとか、そういうことが写真のデータの中に埋め込むと。ただの絵だけではなくなります。絵の中のデジタル情報の中に言葉を入れていくと、どこの誰さんが写っているとか、工事監督の何とかさんが写っているという情報が絵と一体になります。そうするととても検索しやすくなります。そういうような形で見ていくと、例えば、自分たちの町に大きな足跡を残した、工事を担当した監督さんが、次は

十勝大橋で、さらに出世して、また大きな仕事をされているとか、そういったことも見つかってくる。私は、写真や動画を集めていくと同時に、最新の技術を使いながら、利用できる環境を作る、そこに年配の方々の体験や経験をテキストとして、参加型で埋め込んでいく。このような仕組みは、「ほっかいどう学」のインフラの一つではないか。まさに開発局さんの仕事、インフラづくりにつながるのではないかと考えております。

○原氏 ありがとうございます。本当はこういう話を延々とやっていきたいのですけれども、もう（16時）半を過ぎてしまって。

次に、もう既に少しそういう話になっているのですけれども、まさに「ほっかいどう学」をこれからどう展開していったら良いかというあたりで、今度はさっきの逆で、新保先生の方からお願いします。

○新保氏 スライドをご覧ください。今ちょうど北海道総合開発計画は第8期が始まったところですが、教育の方は、次の学習指導要領が動き出しているところです。ちょうど今パブコメが終わったところで、3月末に出る予定です。次の学習指導要領では、「聖徳太子はやめて厩戸王にする」予定でしたが、パブコメで反対意見が多く、やっぱり聖徳太子のままで進めると報道されていました。平成29年度は、教科書を作ります。平成30年度は教科書検定。平成31年度は教科書採択。そして、平成32年度、東京オリ・パラのときに全面実施という流れになっています。

この平成29年度からの3年間を移行期と言います。この期間は、いろいろなトライアルができるおもしろい時期とも言えます。

次の学習指導要領のキーワードは、「社会に開かれた教育課程」です。教育というのは、その子の人格が自己実現して完成されたものになっていくことが大事なのです。それに加えて、社会とちゃんとつながった人間として育つよう教育課程がちゃんと社会につながるようなものにしていこうという考えです。まさに我々が今やろうとしている「ほっかいどう学」の考え方に近いわけです。

社会科は、そんなに大きく変わるわけではありません。ただ、都道府県に関する学習は、社会科では少し増えそうです。でも、北海道にとって十分かと言ったら、我々考えているところからするとまだまだ足りないかなと思います。

「ほっかいどう学」はいろいろな可能性があると思います。北海道教育委員会が社会教育の一環として行っている「ほっかいどう学」は既に先行しています。一緒にやれば良いと思います。また、「社会に開かれた教育課程」のモデルとして「ほっかいどう学」を学校で実施していきたいです。総合的な学習時間、これは各学校が独自の計画を作って良いことになっているのです。その「ほっかいどう学」モデルを作って提供していくとか、何かプロジェクトを立ち上げ、小さな実践を積み上げて、各学校の先生に教材パッケージを提供するとか。副読本やウェブでの情報提供も良いと思います。それから、教師向けの研修も大事です。いろいろな可能性があります。いずれにし

でも学校に「ほっかいどう学」を届けていくことがゴールだと思います。

ヒントになる事例があります。今、札幌市の雪対策室と「さっぽろ雪学習プロジェクト」を推進しています。プロジェクトでは、こうした『雪学習ニューズレター』をこの冬7回出しました。9、10、11、12、1、2、3（月）の7回です。これは、A3裏表の大きさに「雪学習のヒント」が書いてあります。毎月5,500枚刷りまして、これを一人ひとりの小学校の先生にお届けしたのです。

つまり、先ほど言いましたように、先生方が、今、雪のことを知らないです。「北海道の冬ってどうなっているのか」「札幌の冬というのはどんな特徴があるのか」ということを知りませんので、これを提供しました。パンチで穴開けて保管しておけるような工夫もしています。これは全部札幌市役所の雪対策室が中心に行っています。でも、除雪の話は、実はあまり出てこないのです。毎号「Q&A」のコーナーで、ちょっとだけ除雪の話が出てきます。雪対策室の太っ腹なニューズレターの提供となっています。こうやって札幌の冬や雪への関心や理解が広がるのが市民の意識を高めることにつながると長期的な見通しを持っているのです。

いきなり学校、教室の中に入っていくのは大変です。少しずつ息長く「ほっかいどう学」を広めていくことが大事だと思っております。

以上です。

○原氏 後でまた、その辺の戦略的なことを話したいなと思うのですけれども。次に、今先生。

○今氏 先ほど新保先生の方からお話があった中で、若手の先生が日勝峠を知らない。そういう若手の先生を輩出してしまった大学かも知れないので、ここにいてお話しするのが非常に辛いところがあるのですが、私としては、まず、そういうような学生さんや先生をなくすように、日ごろから学生さんと「北海道ってこうやって開かれてきたんだよね」ということを、常に語り合うことが必要だということを、今日改めて勉強させてもらいました。

私からは、2点ほどのお話になります。

1点目は、「ほっかいどう学」は社会を創る学びとして大人と子どもがともに参画して取り組むことです。今、新保先生から学校のお話がありました。一方で、学校以外でも学ぶことが必要と思います。学校外の学びというのは、学校とまた違います。社会教育の立場から見ると学校教育というのは、社会に出ていくために必要なことを中心に学ぶ。そして、社会教育というのは、社会を創るための学び。というように、それぞれの制度であるとか、内容であるとか方法が異なると捉えられています。

もちろん社会教育というのは、例えば、時間に余裕のある大人だけのものではなく、子どもたちも青少年活動施設なので活動することも入ります。ですから、社会教育という立場からくると、子どもたちも社会を創る学びを大人と一緒にしていくという、ここが、多分、キーポイントになってくると思います。学校でしっかり知識を得

たり、学校でしっかり考える力を得て、そういう子どもたちが大人と一緒に北海道の歩みであつたり、北海道の特徴、魅力というものを見出していくという、そういう社会教育の場、活動が私は必要かなと思っています。

2点目は、「ほっかいどう学」のインフラ整備です。

アメリカの教育思想家にイリッチという人がいます。結構過激な教育論を話す人なので興味尽きないのですが、そのお話は今日は省きますけれども、彼は、「事物、模範、仲間、年長者」を学びの四資源と言っています。この四つの資源があることで学びが高まる。しかし、これらが欠けていると、学びというのは不完全なものになる。とするなら、これから、北海道のことを学んでいくとするならば、まだ課題はあると思います。確かに、たくさんのコンテンツがあり、そしてそれらを実際に自ら取り組んできた人たちがいる。自ら取り組んできた人たちのロールモデルという模範がある。一方で、仲間はいるでしょうか。一緒になって北海道のことを学んだり、語り合ったりする仲間は、今はまだ少数なのではないでしょうか。家庭の中でも、また地域の中でも語り合う仲間、そして北海道の歩みを語ってくれる年長者はいるでしょうか。このイリッチの学びの四資源をしっかりと準備していくということは、学びを支える社会基盤づくりであると思っています。

しかし、そういうものが整備されたとしても、それがどこかに集約されていないと分かりません。先ほど雪学習のニューズレター、非常に良いものと思いましたが。ただ、私は不勉強でその存在を知りませんでした。書店などでは流通していない、図書館情報学という灰色文献の一つですが、今日、購読したいと思いましたが、そういう優れた資料が、どこかに集まっていて、そしてどこかに行けば情報がしっかりもらえるという環境整備は欠かせないと思います。ここは、やはり既存の制度で作られている図書館、博物館に大いに活躍してもらいたいというふうに思っています。

そういうことから、博物館の学芸員の方、図書館の司書の方々にしっかりと「ほっかいどう学」の拠点である図書館、博物館だということの意識づけ等々をしていただきたい。また、教育委員会には社会教育主事という社会教育の専門職を配置することが法によって定められています。社会教育主事の方々は、地域づくりに向けた学習の指導・助言も行うのですが、そういう方々に地域づくりと「ほっかいどう学」を結びつけるようなことをしていただきたいと思っています。

教育のことを考える視点ですが、まず一つは、どういうことを教えるかという「内容」です。それをどのようにして学ぶか。例えば先生から講義を受けるのか、仲間同士で議論して学ぶのか、討論するのか、それは「方法」です。もう一つ大事なのは「仕組み」です。どういう制度を作って学びを支えていくのか。この「内容」「手法」「制度」の三つをそれぞれしっかりと考えることが、これからの「ほっかいどう学」の将来にとって大切なことと思います。

○北室氏 今、今先生から内容、方法と仕組みというお話しありましたが、その中で、私

は一フリーライターですので、これからも漁師みたいにいろいろなネタを必死で探して書いていくというだけです。

ただ、私がつながけていることは、疑問から出発するということで、何かを取材するときに、ベターッと聞いて、何か御紹介しますみたいなことではなくて、自分の中に疑問をギュッと濃縮させていって、その疑問に向かって自分も納得させるために取材するという、非常にわがままな方法かも知れませんが、ただ、やはり疑問を作るということはすごく、案外難しいことで、やはり質問を作るということが、ほぼ取材が終わったと同時に、同じぐらいな感じなのですよね。ベターッとただ聞くということは割と簡単なのですけれども、疑問を作るためには、下調べをして自分の中である程度咀嚼して、その上でなぜなのだというのを、疑問を作らないと、結局のところは、人にお伝えするときに、おもしろいものは作れないのではないかなと自分では思っています。

自分としてはそういう疑問を作り上げて、それでエッジの効いたコンテンツを作ると。エッジをどういうふうに磨くかということが、私が一番こだわっていることでございまして、そこで人が引っかかってくれるようなフックを作りながら、キュッとエッジの効いたものを作っていきたいと。本当にフリーライターなので、そういう職人的なことしかできませんけれども、やっていきたいと思っておりますので、取材にお伺いした際はどうぞよろしく願いいたします。

○原氏 ありがとうございます。

北室さんは、ある意味、潜在的なものをきちっと顕在化させて見せてくれるような職人的な人をどう使うかということが、逆に言うと、問われているのかなという気がしますし、やはり大きな社会全体として、こういったものを社会の仕組みの中に入れていくというときには、それなりに学校教育においても、社会教育においても戦略性というもの、多分、必要になってくると思うのですけれども、その点で、まず学校教育で、新保先生、さっき言った学習指導要領が改訂になって今これからという中で、こういう、例えば、「ほっかいどう学」みたいなものを学校教育と連携させていく。いずれにしても、社会教育も学校教育も、多分、今までやっておられたような、比較的先生方で昔は終始していた指導要領が、教科書、それから授業というようなところへ持っていくことを、これからどんどんと、先生以外の方々も入った体制みたいなことが求められていると思うので、そういったことを含めて、どうですか、ちょっとした戦略性みたいなところは。

○新保氏 学校って本当に入りにくいところなのかも知れません。28年間にもわたって交通安全指導をしてくださったご町内の方も、学校の先生とほとんど親しく話したことがないと言っていました。学校と仲良くなるのは大変です。

今日、今先生のお話を伺いながら、例えば、「ほっかいどう学」が学校に入るには、図書館が良いきっかけになるのではないかと思います。そういうところを使ってジワジワと「ほっかいどう学」を広げていきたい。成功は、最初は小さい方がうまくいくような気

がします。あまり大きな「ほっかいどう学」を作ってしまうとみんな構えられてしまうかも知れません。小さいものを作って、気がついたら学校に入っているというような方法が良いでしょう。ニュースレターも良い作戦かも知れません。北室先生に児童向けのご本を書いていただくのはいかがでしょうか？

○北室氏 『学校では教えない日本地図の不思議発見100』というのを、もう10年以上前に書いたことがあります。

○新保氏 それは子ども向けですか、その本は。

○北室氏 そうです。それはすごく売れていて、子どもを産んだ直後で頭もモヤモヤのところやったのですけれども、でも、それはもう何刷りにもなっているのです。講談社から出ていてそれは日本中の地理の不思議というので書いたのですけれども。

○新保氏 北海道版の、例えば、学習漫画みたいなものでも良いと思うのですよね。今先生と北室さんに筋書きを書いていただいて、それは10冊ぐらいのシリーズで出版するとか、そういう作戦もあるかも知れないですね。

○原氏 なかなか夢があるところで。

今、図書館の話が出ていましたけれども、僕も実は、昔、若いころ北広島に住んでいて、北広島は市制施行しているのですけれども、図書館がなかったのですけれども、住民運動で図書館をというので事務局的なことをやっていて、そのきっかけというのは、元々置戸町というところの図書館が、5年連続貸出冊数日本一というのを続けていて、その館長の沢田さんという方が、まさに図書館と地域づくりを結んで、森林工芸、オケクラフトというのを図書館がやっているのです。図書館の館長主導でオケクラフトを作ったり、図書館の館長が主導で焼酎とか、ワインとかを作っているという。それに関わる本が図書館にズラッとあって、そこで人材育成するみたいなことをやっています。

ただ、一方で、図書館司書の方々からいうと、ある意味、邪道とは言いませんけれども、なかなかそういったことを理解していただくのは難しいかなというふうに、個人的には思っているのですけれども、今先生、どうですかね。その点は。

○今氏 だからこそ専門職の方に期待するところが大きいですね。図書館は社会教育施設であり、社会教育は「社会を創る学び」ですから。

実は、北海道は、条例で設置している公共図書館は、ある1市を除いては全てあるのですが、町村に関しては半分しかないのです。また、子どもたちにとって一番身近で、いろいろな情報に触れるところは学校の図書館です。でも、学校の図書館は、以前の新聞報道でもご存知のとおり、十分な冊数もなくあっても古い資料ばかりというところも多い現状があります。学校の図書館自体は地域の公共図書館と違い、保存図書館ではないのです。永久に資料を保存するのではなく、子どもたちの学習指導にあわせて本や資料を入れ替えたりしています。

とすると、先ほど新保先生のお話にあったように、これから学習指導要領が改訂されるので、それにあわせて蔵書の見直しも始まると思います。その時に、北海道のこ

とを学ぶ分かりやすいテキスト、まさに北室先生のような方々に、分かりやすい、おもしろいと思うようなお話をたくさん書いていただき、そういう作品が、まず子どもたちの身近にあり、朝読書の時間でも、昼休みでも子ども達が手に取るようなことがあると良いと思います。北海道は、今、学校統廃合が進み、地方では、スクールバスとかで通う子どもたちが多いのですが、そこでゲームをやっているのではなくて、できればそういう本を、漫画でも良いですから、読んでもらいたいと思います。もしかしたらビデオでも良いかも知れません。5分ぐらいのショートムービーを子どもたちがゲーム機で見て帰っていくとか、こういうことがあっても良いと思います。そういったような学び方も一つあるのかなと思います。

あとは、図書館は、ぜひ地域を学ぶ学習会であったりとか、地域の人が書いた記録とかを出版したりとか、そういうところに取り組んで欲しいと思います。昭和30～40年代にかけての全国の優れた図書館実践を行っていたところは、図書館自身が郷土史を発行していました。そういうところまで踏み込んでいる。先ほど原先生からもありました、まさに置戸ではありませんが、そういったような取組などもやっていただければ良いのかなと思います。

国の教育に関する答申が一昨年12月に3本出ています。学校の先生方の養成・採用・研修の仕組みを整えるとか、地域で学校をしっかりと見ていこうというコミュニティスクールのお話であるとか、そういう国の文教政策ともタイアップをしながら、北海道のことを学ぶ機会を、先生方に対して、大いに増やしていただき、未来を担う子どもたちを育ててほしいと思います。

戦後間もなく、北海道大学に教育学部ができます。戦前はありませんでした。戦後、北海道大学の教育学部の立ち上げに呼ばれたのは城戸幡太郎（きどまんたろう）という教育学者です。彼は、北海道大学教育学部の使命は何か。それは、北海道の総合開発を担う人材を育てることであると考えました。義務教育を終えた人々、今で言う高校生とか大人ですが、そういう人たち一人ひとりが、主体的な地域づくりの主人公になり、開発の担い手となる。そのために、学びの計画を作り実践するなど、そういう力を地域の人と共に育てるのが、北海道大学教育学部の使命としました。今一度そういうことを私たちは振り返りならやっていけたら良いかなと思います。

○原氏 ありがとうございます。こういう話をしていると本当に尽きないのですけれども、もう時間が来てしまっています。

今日、お三方のいろいろなお話をいただいたわけですが、基本は、いろいろな戦略性もありますが、そこにはやはり人というか、学校であれば先生、図書館であれば図書館司書の方とか、いろいろな関わっている方々がいて、やはりその人、一人ひとりに「ほっかいどう学」なるものを、ある程度意識してもらわなければならないですし、そういった方々に、まず理解を得なければならないというふうに思います。

実際、私もずっと10年以上、社会資本整備といった部分をテーマにして、新保先生

と学校教育に関わっていますけれども、今から10年以上前、学校教育に一番最初に行き除雪の授業を新保先生とさせていただいたのですけれども、そのとき札幌市は100億円の税金を投入して、これだけの除雪をやっているみたいなどころでもって、いろいろ先生と授業計画を作ってやったのですが、非常に私自身は慎重というか、心配しながらやってきました。というのは、どちらかというと公共事業をやることの応援団を増やすために来ているのではないかというふうな変な目で見られるのではないかと、かなり慎重に行っていたことを今でも覚えております。

その時期に比べると、今はかなり学校とやること自体はやりやすくなりました。ですけれども、やっぱりここは、それこそ北室さんの“ノブレス・オブリージュ”ではありませんけれども、そういう状況の中でも、やはりそういうことではなくて、やはり公共事業、社会資本整備そのものの社会的意味だとか、どうしてもその裏でもって支えている人とか技術とか、そういったことというものがきちっと知られていないということ、きちっと知っていただくという、そういったことを基本にして、やはり進んでいかなければならないのではないかと、改めて思っています。

今回、新しい総合開発計画の中に教育が入ったということ、まさに画期的だというふうに思っています。実際、我々こういったことを少し私自身が個人的にやってきて感じていることは時間がかかります。最低でも10年は、これは開発局さんに言うのもあれですけれども、10年はやっていただかないとなかなか見えないのではないかなと思っています。お聞きしますと、幸いにしてこの事業には予算がないというふうに言われておまして、そういった意味では、金の切れ目が縁の切れ目ではないということで、これは10年ぐらいやっていけるかも知れないなというふうに私自身は思っております。

ただ、金がないと皆さんと、これは本当に北海道開発含めてお金かかることですから、一緒に手を組んで、最低でも10年やる覚悟を持ってこの事業に、私自身も小さいですけれども、協力をさせていただきたいなというふうに思います。

本当は、皆さんからもご質問等をいただければなというところなのですけれども、ちょっとお時間がないということで、これまたキックオフということで、また次回のその後ということで、最低でも10年はやりたいというふうに私自身は思いますので、それはまたの機会にということで、これで、この場でディスカッションを閉じさせていただきたいと思いますが、本当にパネリストの皆さん、今日御来場の皆さん、長時間どうもありがとうございました。

それでは、これで司会の方をまた戻したいと思います。

○司会 パネリストの皆さま方、そして、コーディネーターを務めていただきました原様、本当にどうもありがとうございました。

ここで、パネリストの皆さまが御降壇されますので、御来場の皆さま、今一度大きな拍手で。(拍手)

7. 閉 会

○司会 本日のプログラムは、以上で終了でございますけれども、今後とも御来場の皆さま方に参加いただいて、あるいは御支援・御協力をいただきながら、「ほっかいどう学」を進めてまいりたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、以上をもちまして、「新たな北海道総合開発計画に関するシンポジウム～『ほっかいどう学』の展開に向けて～」を終了させていただきます。

皆さま方、長時間にわたり御清聴いただきましてありがとうございました。どうぞお気をつけてお帰りください。(拍手)

(以 上)